

どうやら英雄が逆行した模様です

もこりん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

火影になつたナルトをアカデミー時代にぶつこんでみました。

目

次

プロローグ

第1話

第2話

第3話

8

6

3

1

プロローグ

それは、ある日のことであつた。

火影として、一日中数多くの書類を捌いていく日々。

忍としての仕事どころか、訓練の時間さえ滅多にない。

とはいえ、彼に回つてくる書類はほとんどが火影の印鑑が必要な物だけであつた。

それも、彼の側近が非常に優秀だつたからなのだが、それでも彼には1日がかりの大仕事なのだ。

帰宅は深夜、家族との団欒の時間も限られていた。自由などは無いに等しかつた。

それでも彼は満足していた。

火影は彼の幼少の頃からの夢であり、憧れであつた。

たとえどんなに書類にまみれていようが、先代から残る里の闇を思い知らされようが、彼はそれを誇りに思つていた。

だが、そんな日常も終わりを告げる。

争いが起きたわけでは無い。

まだ忍界大戦の傷跡も残り、当時の世代が未だに働き盛りである。誰も戦争などは望んでいなかつた。

何より、かつて世界を救つた二人の力が未だ衰えていないにも関わらず、彼に真正面から喧嘩など売るものはいない。

彼の健康にも問題はなかつた。

馬鹿は風邪をひかないとよく言うが、彼はそれを体現したかのような存在であつた。

おそらく、人柱力であるが故の異常な回復力が原因であつたのだろう。

もちろん、暗殺されたわけでもない。

世界を救つた力は、たかが不意打ちで破れるほどやすいものではない。

い。

そもそも、火影ともあろうものが、そうそう暗殺できる環境になどいない。

では何が起こつたのか。

それは、誰にも分からなかつた。

分かることといえば、彼、すなわち七代目火影が忽然と姿を消したことだけ。

彼がどこへ消えたのか、どうして消えたのか、どうやつて消えたのか。

そして、里の、ひいては忍界の未来はどうなるのか。

あるいは、五代目火影や六代目火影、彼の側近、そして世界を救つたもう一人あたりは何かつかんでいたのかもしれない。

けれども、たとえそうであつたとしてもどうにもならなかつたのは事実であろう。

彼が戻つてくることはなかつたのだから。

これは、彼が直後にこの時のこと語つた一部始終である…

「あ…ありのまま さつき 起こつた事を話すつてばよ！」

『オレは 書類整理をしていたと思つたら いつのまにか寝つ転がつて空を見ていた』

な… 何を言つているのかわからねーと思うが おれも 何をされたのか わからなかつたんだつてばよ…
頭がどうにかなりそだつたつてば…：

マダラだとかかぐやだとか そんなチャチなもんじやあ 断じてねえんだつてばよ

もつと恐ろしいものの片鱗を 味わつたつてばよ…』

第1話

書類整理をしていたはずなのに、気づけば空を見上げていた。いや、それだけであればナルトもそこまで動搖しなかつただろう。もうとっくに成人しているのだから、酒に呑まれたことも一度ならずある。

さすがに、今回のようなひどい記憶の混乱は経験がなかつたが、せいぜいヒナタに一日中怒られる程度で済んだであろう。もつとも、愛妻家のナルトにとつてはそれもひどく辛いことではあるのだが。

そう、何よりもナルトを動搖させたのは…
サスケに顔を覗き込まれたことだつた。

「ナルト、さつさと立て。和解の印を結ぶんだ。」
イルカ先生らしき声が聞こえた。

しかし、いつもより妙に若々しかつた。
よく見れば、サスケも幼い頃の姿だ。

ふと気づくと、身体中に痛みが走つていて。

その中でも、受身を取らずに投げられたようなあの独特な痛みがナルトを襲つた。

思わず起き上がろうとすると、身体に違和感を覚える。

どうも自分の身体が全体的に小さくなつているようだつた。

そんな状況に、ナルトは動搖を通り越して720度ほど回り、かえつて冷静になつた。

それを抜きにしても、一応すでに火影として落ち着いた身である。このくらいの動搖に、いつまでも身を任せてはいなかつた。まずナルトが考えたのは、これが夢である可能性。もつとも納得出来るものではあるが、この場合は何も心配はいらなければ一旦置いておく。

次に考えたのは、幻術であるという可能性。

しかし、すでに九喇嘛と打ち解けている今、普通の幻術は効かないはずだ。

そう考えたナルトの脳裏に、ある出来事がよぎった。

八尾の人柱力であり、ナルトよりもずっと先に尾獸と打ち解けていたキラー・ビーがなすすべもなくかかつた幻術。

そう、無限月読である。

とはいえ、もし本当に無限月読ならば、火影であり、人柱力であるナルトが事前に知らなかつたことに説明がつかない。

何せ、あの幻術には馬鹿でかいチャクラと団体を持つ十尾が必要だからである。

そもそも、この可能性を考えたところで何もできることはない。

そこで、ナルトは自らの経験を思い出す。

かつてナルトがサクラと巻き込まれた幻術、限定月読のことだ。

あれならば火影に気付かれずに事を進めるのも不可能ではない。

あの時はまだ九喇嘛と和解していなかつたが、それでも共闘はした。

それなのに抜け出せなかつたのは、それがとてつもなく強力だったからだ。

そんな限定月読だが、あの時はその世界でのナルト、メンマという名前ではあつたが、それを打ち倒したことにより幻術から逃れられた。

この場合なら、頑張ればどうにかできる。

最後に、これが本当に現実である可能性。

この場合、忍界では知られていない新たな力を仮定することになる。

ナルトはここまで考えたところで一旦思考を止める。

ここで寝転がつたままでは選択肢を一つに絞れない。

それに、元々ナルトはあまり考えるのが好きではなかつた。

それは、火影になつた今でも変わらない。

ついでに言えば、いつまでも寝転がついても怪しまれるばかりである。

起き上がつて周りを見渡すと、忍者アカデミーの校庭で、物の見事に幼くなつた同級生たちが囮んでいた。

女子は皆サスケに黄色い歓声を上げている。

サクラやイノまでそうしているのを見ると、少し悲しくなつた。

男子は幾分かこちらに目を向けているが、瞳に映るのは嘲笑ばかり。

いや、忍同期男子メンバーはこちらを心配そうに見てくれていた。サクラとイノも見習つてほしくなる。

ふと後ろを振り向くと、幼いヒナタがナルトを見つめていた。

思わず数秒見つめ合つてしまつたが、いつまでもそうしているわけにもいかないので、まだ若いイルカ先生の元へ向かう。

しかし、小さくなつた身体のせいで思うように歩けない。

見れば、サスケはすでにドヤ顔でイルカ先生のそばに立つていた。

「遅いぞ、ウスラトンカチ。俺を待たせるな。」

サスケがそう言うと、さらに女子の歓声が上がる。

男子はさすがにうつとうしくなつてきたのか今度はナルトを非難するような目を向ける。

ナルトは幼い頃に受けた差別を思い出し悲しくなつたが、火影にまで上り詰める間にできた仲間達を思い、そんな悲しみを振り払つた。

なんとかイルカ先生の前まで辿り着き、サスケと和解の印を結ぶ。

その時、ナルトはアカデミーでサスケと初めて組手をしたことを思い出す。

どうやら今はその組手の時まで戻つてゐるようだと氣付いたナルトは、これからのことと思つてため息をつくのであつた。

謎の現象の中、これからのことを考えられるほどにナルトも成長したのだ。

この時、ナルトに見つめられたヒナタが顔を赤らめていたことに気づかないところは全く変わつていなかつたが。

第2話

ナルトは今、家路についていた。

あの組手の後、歩くのさえやつとであつたナルトを見かねて、イルカ先生がナルトを木の葉病院まで運んだのだ。

その後の診察で異常が見つからなかつたため、軽い脳震盪でも起こしたのだろうと判断され、入院もしなかつた。

その頃になると、すでにナルトも持ち前の勘で問題なく歩けるようになつていた。

もつとも、まだ激しい動きや細かい動きはおぼつかないのだが。ナルトは手詰まりを悟つていた。

無限月読が見せる幻術は対象者の望む世界になる。

さらに、幻術にかかつた本人でさえそのことに気が付かないのだ。このことは、実際に無限月読にかかつた何万人もの証言で明らかにされている。

唯一、テンテンだけが始めのうちに違和感を覚えていたというが、その違和感もすぐに無くなつたらしい。

限定月読にしても、ある程度は自らの望みが反映されていた。

これはナルト自身が体験したのだから間違いはない。

だが、この世界はどうだろう。

果たして自らの望みが反映されているだろうか。

今の所、自らの過去となんら変わりがない。

里の皆の反応からして、恐らく両親は生きていらないだろう。

バタフライエフェクトなんていう言葉があるが、ほんの小さな歪みで未来など大きく変わるものだ。

限定月読ではカバーしきれないほどに複雑なのだ。
無限月読だつて歪みに耐えられるだけで、歪みは存在していただろう。

現状ではそんな歪みが未だに全く見て取れない。
それは、無限月読を超える所業である。

それこそ、本当に過去に戻ってしまったと考えた方が納得がいく。ナルトはそんなことを考えながら歩いていた。

現状何もできない以上、出来る限り自然な状態を保つことが最優先だ。

そして、この場合の自然な状態とは自らの過去と全く同じということだ。

あるいは歪みを大きくすればこの世界は破れるかもしれないが、いきなりそんな賭けに出るほど今のナルトは能無しではなかつた。

家にたどり着くと、ナルトは急に感慨を覚えた。

たとえ紛い物だとしても、記憶と同じこの部屋は懐かしいものであつた。

火影になつてからは、さすがにあのぼろアパートに住むわけにはいかなかつたのだ。

そんな感情もひとまず脇に置いておき、九喇嘛との意思疎通を図る。

少なくとも限定月読では九喇嘛も一緒についてきていた。
しかし、この異常事態の中で全く音沙汰のない九喇嘛が一緒についてきているとは考えにくかつた。

案の定、九喇嘛の応答はない。

仕方なく、ナルトは自らの精神世界に入つていつた。

第3話

突然、目線が上がるのを感じる。

思わず自分の体を眺めると、火影時代の体に戻っていた。

子供の姿に戻つてから未だ半日といったところではあるが、ずいぶん久しぶりの感覚であるかのように思える。

元の体に戻つたのは、ここが精神世界であるからだろうか。

自分の精神は元のままであると確認し、ナルトは少し安心した。

ただ、チャクラは今の現実の姿相応になつてているようだつた。

周囲を見渡すと、懐かしさとともに僅かな恐怖を覚える。

水浸しの空間には高濃度のチャ克拉が充満していた。

クラマのチャ克拉というより、九尾のチャ克拉と言つた方が適切だろう。

憎悪を孕んだそのチャ克拉は、慣れ親しんだクラマのチャ克拉とはまるで別物のように蠢いている。

しかし今のナルトには、憎悪に隠されたクラマの悲しみが手に取るように分かつた。

ナルトは本来、ここよりもう一段深い精神世界に入ることはほとんどなる。

むしろ、クラマと和解した後にはこの空間に来ることはほとんどなかつた。

しかし、今この精神世界にいるのは、クラマ側の協力がないせいなのだろう。

クラマがこの世界に一緒についてきていなことを確信し、ナルトはこの世界のクラマのもとへと歩みを進めた。

「お前は何者だ」

クラマが最初に発した言葉はそれだつた。

突然己の依り代となつている人柱力が別人のように変化したときの尾獸の驚きは想像に難くない。

しかも、クソガキと思っていた相手が急に中年の姿となつて現れた

のだから、その混乱もひとしおであろう。

そんな状況下で平然と（少なくとも、さも平然としているかのように）ナルトに問い合わせたクラマには賞賛を送るべきである。

ナルトは事情をクラマに話した。

さしものクラマといえど、この状況でナルトの話を聞かないわけにもいかない。

比較的おとなしく話を聞いていた。

だからと言つて納得しているわけではないようであるが。もつとも、ナルトとしても真実を伝えたわけではない。

現状、真実が真実である保証もない。

クラマという影響力の強い存在に見境なく何もかも吹き込むのは危険であつた。

それに、この世界のクラマにナルトと和解したクラマの話を伝えても、それはきっと混乱の元でしかないだろう。

見ず知らずの他人といつてもいい今のナルトと和解しろなんていうのも、どだい無理な話である。

チヤクラは子供の時のものであつたため、六道仙人の話も省けたのも上々であつた。

「話は理解した。さつさと消えろこのクソガキ。」

クラマはそういうと、もう何も聞く気はないと言わんばかりに口をつぐんだ。

和解した後のクラマを知つてゐる身からすると、この関係はむず痒いばかりだった。

しかし、この世界のクラマは元のクラマと別の存在であると思いつし、ナルトは精神世界を後にしてた。

精神世界から戻つたナルトは、今後の行動方針について考えを巡らせた。

この世界が幻術なのであれば、何か大きな行動を起こすことで破れるかもしれない。

しかしナルトは、この世界がどうにも現実であるような気がしてな

らなかつた。

この世界が現実ならば、何か不都合なことが起きても取り返しがつかない。

幸いにも、今のところは自身の過去の経験と完全に一致している。昔と同じようにすれば、このまま自身の経験をなぞらえる可能性が高い。

未来を知っていることは大きなメリットである。

判断材料が少ない今、現状維持に努めることが最善だ。

考えをまとめたところで、どつと眠気が押し寄せる。

こんなことが起きているのだ、疲れない方がおかしい。

布団に入ると、寂しさが押し寄せる。

思えば、一人で眠るのは久方ぶりであつた。

いつもは家族で暮らす家で寝て いるのだ。

公務での出張でも、火影としての立場上護衛がつく。

もちろん寝室に堂々といふことはないが、ナルトはその気配をはつきりと感じることができた。

元の世界の仲間のことを考えながら、ナルトは眠りについた。